

玉蚊帳吊り（タマガヤツリ）

カヤツリグサ科カヤツリグサ属の一年草。全国の浅い沼地や湿地、水田などに生える。水田を浅水で管理していると多発することがある。背丈は20cm-60cm。根出葉は幅2-5mmで花茎ほどは高くはならない。花茎は直立して三稜形、先端に2、3枚の苞葉があり、その上に数個の葉玉のような花穂をつける。花穂は、初めは緑色だがやがて紫褐色へと変わる。他のカヤツリグサと比べて柔らかく、三稜の茎は指で簡単につぶせる。この茎と紫褐色の葉玉のような丸い花穂でカヤツリグサの中では見分けやすい。

在来種であり古くから目についていたはずであり、葉玉のような花穂をつけることなどから、^{いにしえびと}古人達に取り上げられてもよかったのではないかと思えるのだが、タマガヤツリが詩歌や文芸などに取り上げられることはなかった。辛うじてカヤツリグサの仲間として歴史書に取り上げられた例は、出雲国風土記の島根郡「^{たこしま}蛸蛸嶋」に茅などに混じって「莎」の記載があるかぎりである。その莎の塊茎が生薬の^{こうぶし}香附子として使われていたというハマスゲで、その後は^{かがくしゅう}「下学集」に「香附子」として、「大和本草」に「カヤツリ草」として、「和漢三才図絵」に「蚊帳釣草」としてみられるが、タマガヤツリが記載されるのは江戸時代後期の本草学者である岩崎灌園の「本草図譜」まで待たねばならない。

その本草図譜には、「莎草香附子」、「一種 水莎草」、「一種 かやつりぐさ」、「一種 陸生にて・・・」、「一種 苗葉三稜・・・」、「一種 水辺に生じ・・・」と、画と簡単な説明とともに10種類ほどのカヤツリグサ科植物が記載されている。それを大沼宏平が学名を付したが牧野富太郎が随分と間違っているとして「植物一日一題」の中で校訂した。それによると「水莎草」はカンエンガヤツリ、「陸生にて・・・」はヒナガヤツリ、「苗葉三稜・・・」はヌマガヤツリ、そして「水辺に生じ・・・」がタマガヤツリであるとした。

さて、タマガヤツリが詩歌や文芸などに取り上げられたことはなかったと述べたが、清少納言のように周りの様々なものに

須藤 健一

興味を示していた才女なら、例えば枕草子に、この田の中にあって一風変わった葉玉のような花穂をつけたタマガヤツリが取り上げられてもよかったのではないかと思えるのだが。というのも、清少納言は稲作を知っていたものと思われる節がある。226段で賀茂神社へ参詣するときに田植えを見学し、227段では太秦の広隆寺へ参詣するときには稲刈りを面白がる。さらには94段で、ほととぎすの鳴き声を聴きに行った^{あきのぶあそん}明順朝臣の屋敷では稲こぎも見学している。そんなことから考えると梅雨時になるだろうが、田の草取りをみてこんな段があってもいいのではと思うのだが。

枕草子 226段補遺「五月つごもり」

五月つごもり、清水へまゐる道に、人いと多く田に入りて見さわぐは、草刈るなりけり。早苗取りしかいつのまに、まことにさいつころ賀茂へ詣づとて見しが、あはれにもなりにけるかも。田なかに小さき三稜草の茎の頭に、三つ四つ、紫立ちたる丸きが見ゆるは、あやしうこそいとをかし。

